頼原退藏著作集

第十一卷

頴原退蔵著作集　第十一巻

定価　二五〇〇円

昭和五十五年六月一日印刷
昭和五十五年六月十日発行

著　者　頴原退蔵
発行者　高梨茂
印刷者　山田博
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二―八―七
電話（五六一）五九二一―九
振替東京二―三四
©一九八〇　検印廃止

目次

俳諧の季についての史的考察　七
季題観念の発生　二九
芭蕉俳諧に於ける季節感　三八
俳諧の「季」　四五
季の問題　五九
季の問題と連句　六九

芭蕉と老荘　七三
芭蕉と旅　八〇
旅と芭蕉　八六

『貝おほひ』一　九二
芭蕉と寿貞　一〇三
芭蕉の像　一二五
芭蕉の書画　一三五
芭蕉の真蹟　一三五
芭蕉と竹　一四一
芭蕉の逸話　一四六
芭蕉の言行　一四七
芭蕉断片　一四九
京都と芭蕉　一五四
芭蕉と京都――寂・しをりと軽み　一五八
芭蕉と大阪――二百五十回忌にちなみて　一六三
正覚寺の芭蕉塚――『谷木因のことども』を読んで　一六六

芭蕉の句集について　一七三
『芭蕉一代集』の不審抄について　一八一
誤伝された芭蕉の句　一八七
芭蕉俳句出典考　二〇四
『音頭集』中の宗房の句　二二四
宗因一座の芭蕉連句　二二七
芭蕉連句の新資料　二三六
『俳諧七部集』解説　二三三
『奥の細道』の原本　二五二
『三冊子』解説　二七〇
『三冊子』について　二八四
『旅寝論』解説　二九八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『芭蕉翁十六篇』について　三〇八
『俳諧十六篇』の作者　三一三
宇鹿の『附句十四体』　三一五
芭蕉の言葉　三二九
『貝おほひ』の一写本　三三六
『貝おほひ』二　三三九
『田舎の句合』の延宝版　三四三
鮃の図　三四六
芭蕉翁行脚掟　三四九
『松葉集』　三五七
前句附点者としての芭蕉　三五九
後記　三六一

芭蕉三

俳諧の季についての史的考察

俳諧に於て季といふものが、此の芸術を構成する上の最も重要な一要素となつてゐる事は、こゝに更めて言ふまでもない。特に発句には必ず季の詞を持たなければならぬといふのが古来からの約束で、季をもたない所謂雑の発句といふものは、極めて特殊の場合――例へば名所の句とか祝賀の句とかいふやうな場合の外は、殆んどよまれぬ事になつてゐる。俳諧にかゝる特殊の形式がどうして生ずるやうになつたか。それは種々の立場からこれを考察する事が出来るであらう。或は俳句が世界最小の詩形であるといふ点から、或は我が国の風土的関係から、或は和歌や物語と共通な物の哀れの論から、さま〴〵の解釈と説明とがすでに試みられてゐる。さうしてそれは恐らく、さういつた種々の事がらが湊合されて、こゝに季といふ一の伝統的形式を生むに至つたのではあらう。しかしそれが既に一の伝統的形式である以上、これが発達変遷の過程を知るべく、何よりもまづ史的考察が必要でなければならぬ。その考察の結果は、また純文芸の理論と相まつて、更にこの伝統的形式の本質的価値の問題にまで進まなければならない。現に俳壇に於ては、季題無用論も夙くから叫ばれてゐる。しかもさうした論者の中に、却て俳諧芸術に対する真摯ささへ認められる。だが私はこゝでその問題にまで触れようといふのではない。たゞ俳諧に季の詞若しくは季題といふ一の形式を生ずるやうになつた過程を、我が国の太古の文芸にま

で溯つて、そこから次第にながめて行つて見ようと思ふのである。

文学の最初の発生はもとより詩であらう。そしてそれが抒情詩であるか、叙事詩であるか、それははつきり分らない。しかし少くとも我が国の文学史上、最も古いものとして伝へられてゐるものは抒情詩であつた。即ち記・紀の中に伝へられてゐるうたである。勿論それはまだ五言七言などの形が十分定つて居ない頃の事であり、且つ今日伝はつてゐる形が、そのまゝ素盞嗚尊や神武天皇時代にうたはれて居たとは思はれない。今日の形は、恐らく語部などの伝誦時代にきまつたものであらう。しかし歌はれてゐる内容はほゞ太古のものと同一にちがひない。で是等の歌謡の内容には、季題的のものの萌芽でも見出し得るであらうかどうか。原始人の自然に対する感情については、専門の学者が多くの例証をあげて説明してくれてゐる。彼等はむしろ自然を恐れ且つ尊んだ。所謂風雅の対象として、自然の風物を眺める余裕を持つことは出来なかつた。記紀の歌謡時代は、勿論さうした原始時代より遙かに進んでは居た。しかしまだ四季の風物を歌にするといふことはなかつたのである。尤もそれは自然を全くよんでゐないといふのではない。例へば伊勢の海の大石に這ひまつはるしたゞみといふ小さな貝や、久米の子等の垣本に生えたかみらとかはじかみとかいふ小さな植物などまで歌つてはゐる。しかし是等はすべて比喩として——即ちしたゞみは賊軍を包囲攻撃する皇軍の状に、又かみらやはじかみは皇軍をなやました賊軍に比して言つたのであつて、自然そのものを詠んだのではなかつた。随つて記紀の歌謡中には、まだ純然たる叙景といふものを見出されないのである。応神天皇が近江の菟道野に幸され、葛野といふ所を望まれて、

ちばの葛野を見れば　もゝちたる家庭(やには)も見ゆ　国のほも見ゆ

と歌はれた。これなどは全く葛野を見渡した景色そのものをよまれた御歌のやうに思はれるが実はさうではない。もゝちたる家庭、即ち富裕な民家と、国のほ、即ち豊饒な土地とを喜ばれた御歌である。景色の詠歎ではなくて、民が富み土地が肥えてゐることを喜ぶ、いはば功利的感情のあらはれである。又履仲天皇が御弟の謀叛により、難をさけて埴生坂といふ所から難波の皇居を望まれた時、

埴生坂我が立ち見れば　かぎろひのもゆる家むら　つまがいへのあたり

とよまれた。これも一見叙景の御歌のやうであるが、実はその燃ゆる火を御覧になつて、后の御身上を思ふ御心が主となつてゐる。以上の例によつても判る通り、記紀の歌謡時代における我が国民は、まだ自然の風物を客観的にうたふといふ事はなかつたのである。随つてそこに季題的の要素も亦、全く見出すことは出来ない。

次に我が国民のもつ文学は、いふまでもなく万葉集である。万葉集中の歌には、仁徳天皇の后の御歌のやうな、記紀の歌と同時代のものも多少はあるが、まず大体奈良朝時代の文学を代表するものである。この時代になると、我が国民の自然に対する眼は、もう大きくそして深く開いて行つてゐる。勿論すぐれた叙景の詩も数多く持つやうになつた。即ち当時の歌人は文学表現の対象として、自然の美しさを十分に観賞し得る迄になつてゐたのである。中にも山辺赤人・高市黒人などは、特に自然詩人としてのすぐれた天分と才能とを持つてゐた。例へば誰でも知つてゐる、

田子の浦ゆ打出でて見れば　ま白にぞ富士の高ねに　雪はふりける

だとか、

和歌の浦に汐満ち来れば　潟をなみ芦辺をさして　たづ鳴き渡る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぬば玉の夜のふけ行けば　ひさぎ生ふる清き河原に　千鳥しばなく

などといふ歌になると、そこにはもはや対人間もしくは対社会的の感情は、全く見られないので、只自然のみが純客観的にうたはれてゐる。かうして自然がそのまゝに詠歌の対象になつて来ると、自ら歌人の心は四季の特殊な風物に力強く引きつけられるであらう。彼等は萌え初めた柔かな若葉の色が、青葉から紅葉に、紅葉から一片の朽葉と変つてゆくさまにも、注意深い眼を向けずにはをれなかつた。わけても寒い陰鬱な冬を過した後に待ち得た暖い春の風物と、さうしてさはやかな色と光とに満たされた秋の自然とは、彼等の心に豊かな詩興を齎した。例へば赤人が三諸の神南備山に登つてよんだ長歌の一節にしても、

明日香の古き都は山高み河遠白し　春の日は山し見がほし　秋の夜は河しさやけし　朝雲にたづはみだれ　夕霧にかはづはさわぐ

と、朝夕の風物に対して先づ春秋の眺めをのべてゐる。又かの名高い額田王は「春山万花之艶」と「秋山千葉之彩」とを比べて、春の花よりも秋の紅葉を愛すると歌つた。かうして春秋の優劣を比較するやうな歌さへも、既にあらはれたのである。だがかやうに四季の風物を対照して考へる事は、我が国の風土・気候上自然に発生すべき思想で、已に古事記にも春山霞男と秋山下氷男とが妻を争つた伝説が見えてゐる。これはいふ迄もなく春と秋とを人格化して対照させたのではあるが、しかもこの伝説時代にはやはり自然が人間と結びつけられねば語られなかつた。春秋の自然そのものが、人々に愛され歌はれるやうになつたのは、万葉時代から以後のことであつた。さうして春秋の優劣比較論が爾来しば〳〵我が国文芸上の好題目として繰返されてゐることは、こゝに説くまでもない事である。

かうして万葉の歌人には、恋や離別やと共に四季の風物が、彼等の歌の好題目となつて来た。梅や鶯や霞や陽炎や、藤の花、桃の花などが盛んによまれた。夏になると郭公、橘、夏草、撫子、百合――この百合はどういふわけか古今集以後には歌はれないやうになつたものだが――それから秋は天の河、秋風、紅葉、萩の花、鹿の声、蜩やこほろぎの鳴く音、少女が汲む井のもとに咲いたかたかごの花までもよまれた。冬は巻向の小松に降る白雪、ゆ笹の上に置く霜などが歌はれてゐる。かうした四季の風物を題材とした歌を、今万葉集中から一々選び出して見たら、かなり多くの数に上るであらう。だから万葉の編纂者はすでに雑歌、相聞、挽歌等の部目と共に、春夏秋冬、即ち四季の部目を立てて分類してゐる位であつた。しかもこゝに注意すべき事は、その四季の分類は単に春歌、秋歌といふ風に分けられてゐるのではなくて、春雑歌とか夏相聞とかいふ如く、雑歌や相聞と結びついて一部目となつてゐるのである。これは一面かやうに自然を詠ずる歌が、だん〳〵多くはなつたものの、万葉時代全部の傾向から見ると、なほ自然をそのまゝ歌の対象とする事は比較的少かつたといふ事実を、有力に物語つてゐるものであらう。即ち万葉時代の歌人には、やはり自然から人間をすつかり切離して考へることは出来なかつた。花の色にも鳥の声にも、先づ彼等は人を偲び妻を思ふ情を寄せずには居れなかつた。それは和歌が抒情詩たる性質上勿論当然なことで、後世になつてからでも、歌集の大部分――特に優れた歌を多く持つて居る部分は、四季の部ではなくて、恋や雑の部である。だがとにかく万葉に四季の部目を設けながら、なほこれを独立した部目と認めなかつた事は、少くとも当時所謂季の観念が、文芸上特に重視されるまでになつてゐなかつたからだと見なければなるまい。即ち俳諧の発句のやうな、季を中心とした文芸観などは、勿論存在すべき筈がない。のみならず当時の歌は、まだ四季の風物に対して特殊の聯想的

感情をもつといふ事はなかつた。例へば鹿の声や虫の音をきいても、後世の歌人俳人のやうに、必ずしも物悲しい若しくは佗びた感じなどを起さなかつた。

此のごろの秋の朝明に　霧がくり妻呼ぶ鹿の　声のさやけさ

と、暁の鹿の声の朗らかさを愛してゐる。或は又、

陰草の生ひたる宿の夕影に　鳴くこほろぎはきけどあかぬかも

と、最も淋しさを誘ふやうな情景の間にあつてすら、只虫の音を飽かず聞きたいとだけ歌つてゐる。即ち是等の歌人はある特殊の風物から、直ちに特殊の境地や感情を聯想したり誘発されることはなかつた。彼等の感情はあらゆる風物に対してまだ自由であつた。だから万葉の歌について考察した結果は、かういへるであらう。そこにはもはや四季の風物を題材としてゐる点に、季の観念は十分に認められねばならぬ。しかし伝統的形式としての季、即ちある特殊の四季の風物現象が、文芸の重要な一要素として特定的な地位を持つといふやうな傾向は、まだ全くこれを認めることは出来ないと。

万葉以後古今集が出るまでの間、約百年間は漢詩漢文の全盛時代であつた。和歌は所謂色ごのみの家に埋木の人知れぬ事となつて、朝廷の儀式・賀宴等晴れの場合には、すべて詩文の唱和応酬のみが行はれた。すでに奈良朝時代に懐風藻の編があり、平安朝になると凌雲集・文華秀麗集・経国集など勅撰の詩文集を初め、個人々々の家集も多くあらはれた。これらの集に載せられた作品について季題的の特色をしらべて見ると、懐風藻や凌雲集には、まだ自然の情景のみをよんだ作は殆んど見当らない。春日侍宴・秋夜山池・七夕等の題詠はかなりあるが「玉殿風光暮、金墀春色深」とか「菊風披二夕霧一、桂月照二蘭洲一」などと言つても、それはやがて聖代に逢つた喜びをのべ、後期の悠かなのを歎ずる情などがい

つも主となつて居るのである。又作品を分類してゐる点から見ても、例へば文華秀麗集には遊覧・宴集・贈答・詠史以下約十部目に分けてゐるが、四季の部目はたててない。経国集は欠けた部分があつて全体の面目を知ることが出来ないが、その残存してゐる所だけから見ると、楽府とか賦とかといふ体裁によつて分類してゐるらしい。大分遅れて出た本朝麗藻・本朝無題詩・和漢朗詠集等に至つて、始めて四季の分類もあり、純客観的の自然詩も多く見られるのであるが、これ等はすでに和歌が再び勢力を得た後の編纂であるから、漢詩文としての特殊な季題的傾向の発達と見る事は出来ない。随つて平安朝初期における我が国の漢詩文が、季題観念を深くして行つた点は、多く認められないと思ふ。しかし何にもせよ当時の人々の愛読したものは文選とか、白氏文集とかいふものであつたから、田園詩人たる陶淵明の作や、白居易の遊覧節序の吟などから、自然観賞の態度の上に受けた影響は決して少くなかつた。殊に自然の風物に対する特殊の感じ方——例へば秋風に対して故郷の山川を憶ひ、擣衣の響に閨怨の情を感ずる如き、さうした心の動きは支那人の詩文から学んで来た所が、極めて多かつたであらう。随つて我が国人の詩文集に於ても、かゝる特殊の季題感が漸く固定して行く傾向は明かに認められるのである。

遣唐使の廃止と共に、国民の自覚は再び和歌の隆盛をもたらしめた。即ち延喜の帝の朝に、勅撰集の初めとして、古今和歌集があらはれる事になつた。而してこの集には、まず第一に春・夏・秋・冬の部立が見られるのである。爾来相ついで出た勅撰集は勿論、その他家々の私撰になる集に至るまで、四季の部立を設けないものは殆んどないやうになつた。だからこの四季によつて歌を分類するといふ事は、古今集の編者によつて全く確立されたわけで、これは我が文学史上、季の観念に於ける一つの劃期的事

業といふべきであつた。だが当時の歌人が自然に対する観賞の態度はどうであつたか。これはかの万葉歌人が極めてナイーヴな感情で歌つてゐるのに比して――尤も万葉の歌も時代が下つたものには、大分理智的要素が多く見られはするが――恐ろしく理智的になつてゐる。さうしてそれを頗る技巧的な方法で表現しようとしてゐる。古今集中劈頭第一の歌が、かの、

年の内に春は来にけり一年を去年とや言はむ今年とやいはむ

といふ元方の作である。随分理屈責めに考へたもので、和辻哲郎氏がこれを暦の季だなどと評してゐるのも、誠に尤もな事と思はれる。そこには早く春が立つた事に対する喜びとか驚きとかの情は、少しもあらはれて居ない。まるで数学的に物を見てゐるやうな考へ方である。また例へば、

夏と秋とゆきかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ

といふ歌などにしても、全然数理的な興味から出発したゆき方である。季節の交替に対する芸術的感興などいふものはどこにも認められない。これは固より芸術の正道といふ事は出来ないであらう。だが単に季題的観念といふ点だけについて考察して見ると、かうした暦数上の抽象的な季節のことまでも歌ふといふ事は、確かに季に対する歌人の注意が鋭くなつて来てゐると言はねばなるまい。随つてたとひその考へ方が理智的になり、表現の方法が技巧的になつてゐるにせよ、当時の歌人が花月を賞し、寒暄を詠ずる事が、万葉時代よりもずつと多くなつてゐる事もまた争はれない事実である。しかもその詠歌の対象となる自然の風物が、四季によつてほゞ一定して来たことも注意すべき事である。例へば古今集に春の歌としてよまれたものの題材を数へ上げて見ると、立春・霞・鶯・梅・花・桜・若菜・柳・帰雁・藤・山吹・百千鳥・呼子鳥・春の日・春の雪・春の山・春風等二十種にも足らぬ位である。しかもその

中鶯と梅と花と桜とが春の歌の過半数を占めてゐて、他の題材は僅かに一首か二首よまれてゐるに過ぎないのである。即ち春の景物季題として、最も愛好されるものが殆んどきまつてゐるやうな有様である。更に夏の歌について見ると、全体三十四首中二十八首までは郭公をよんだもので、その外には遅桜・花橘・蓮・夏の月・常夏が各一首づゝと、それから前にあげた「夏と秋とゆきかふ空の」といふ例の暦の季的の歌が一首あるだけである。郭公は成程万葉時代から夏の景物として最も喜ばれたものではあるが、まだこれほど極端ではなかつた。外に卯の花でも姫百合でもよまれてゐる。その他夏草・紅花・ひぐらし・真葛・杜若等が夏の歌にかなりよまれてゐる。

かやうに古今集中に歌はれた四季の風物は、――例へば菊花などの如く、万葉時代の歌に全く見えないもので、古今集になつてから盛んに歌はれたやうなものもあるが、それは菊が舶来のもので、まだ奈良朝の頃までは汎く観賞せられなかつたといふやうな特殊の事情があつたからである――大体に於て万葉時代よりも、却てその取材的範囲が縮小されてゐる。これは一見季題観念の退歩の如く思はれるが、実はある自然の風物現象を、特に春季の景物とし、或は秋季に翫賞すべきものだとするやうな、即ち換言すればある自然の景物を特定の季題として取扱ふ傾向が、従来より強くなつて来たわけである。随つてこれ等の景物に対する季題的な聯想感情も次第に一定して来た傾きが見られる。かうなると例へば梅とか鶯とかいふものが、もはやそれだけ単独に思ひ浮べられないで、和煦たる春色と必然的に結び付けられて考へられる。即ち連俳に所謂季題の本質は、こゝに十分認められるのである。しかしそれは勿論後世の季題の如く、自然人事の百般に亙つて特定的に考へるといふ程に発達したものではなかつた。例へば花といへば直ちに春の桜を思はせ、月がすぐ秋のものだといふ風にまできまつてはゐなかつたので

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com